

氏 名（本籍）	加 <sup>か</sup> 茂 <sup>も</sup> 尚 <sup>なお</sup> 子 <sup>こ</sup> （山口県）
報 告 番 号	甲第 32 号
学 位 の 種 類	博士（健康福祉学）
学 位 記 番 号	健康福祉博甲第 32 号
学位授与年月日	2025（令和 7）年 3 月 18 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当（課程博士）
学 位 論 文 題 名	関節リウマチ患者の在宅運動療法支援の在り方の検討

論文審査委員	主 査	教 授	丹	佳 子
	副 査	教 授	田 中	マキ子
	副 査	教 授	中 村	文 哉
	副 査	教 授	吉 村	耕 一

## 論 文 要 旨

### 関節リウマチ患者の在宅運動療法支援の在り方の検討

関節リウマチは、慢性の多発性関節炎を主症状とする全身性の炎症疾患であり、その治療目標は、疾患活動性の低下および関節破壊の進行抑制である。疾患活動性や関節構造の状態に応じた運動療法は、患者の QOL の最大化と生命予後の改善に重要な役割を果たすと考えられている。本研究は、運動療法の中でも特に在宅運動療法に着目して、その実施の現状並びにその実施要因を明らかにすることで、在宅運動療法の支援の在り方を検討することを目指すものである。

第 1 章では、本研究の背景について述べる。すなわち、関節リウマチの症状と治療、運動療法の役割、在宅運動療法の必要性、関節リウマチ患者並びにその他の慢性疾患患者への支援について論じる。これらを踏まえて、本研究の目的を、関節リウマチ患者における在宅運動療法の現状とその実施要因を明らかにし、その上で支援の在り方を検討することと設定した。

第 2 章では、関節リウマチ患者の在宅運動療法が行われている現状を明らかにする調査研究について述べる。A 県在住の関節リウマチ患者を対象としたアンケート調査を実施し、得られた 226

名の回答を分析した。その結果、「在宅運動療法がリウマチ患者に勧められていること」を知っている患者は 35.4%で半数にも満たないことが明らかになった。一方で、在宅で行える運動療法に一定の効果があると思っている患者は 93.7%、在宅で行える運動療法が必要であると考えている患者が 91.4%であり、多くの患者の在宅運動療法への知識・関心は高かった。

第 3 章では、在宅運動療法の実施に影響する要因を明らかにする調査研究について述べる。A 県在住の関節リウマチ患者を対象としたアンケート調査を実施し、得られた回答から在宅運動療法実施群 (n=94) と非実施群 (n=132) の 2 群に分けて、比較分析した。多変量解析の結果、年齢が高いこと、裁量度が高い職業であること、注射治療を受けていること、医師が在宅運動療法を勧めていることの 4 因子が在宅運動療法の実施に有意に影響する要因として明らかになった。また、疼痛を感じている患者や寛解していない患者が、「痛くならない程度に体調に合わせて行っている」ことも示唆された。

第 4 章では、関節リウマチ患者の在宅運動療法に関する支援の在り方について考察する。第 2 章と第 3 章で得られた知見に基づき、在宅運動療法実施の支援に関する重要な視点として、患者教育、セルフケア支援と多職種連携での支援の 3 点を掲げて、在宅運動療法支援の在り方を論じた。最後に、本研究の知見を踏まえ、関節リウマチ患者が在宅運動療法を重要なセルフケアの一つとして捉えて主体的に取り組むことができるような支援の在り方が重要であると結論した。

## Abstract

### A study on how to support the home-based exercise therapy for patients with rheumatoid arthritis

Rheumatoid arthritis is a systemic inflammatory disease with chronic polyarthritis as the main symptom, and its treatment goal is to reduce disease activity as well as to suppress the progression of joint destruction. The purpose of this study is to investigate the ideal support for the home-based exercise therapy and also to clarify the current status of its implementation and the factors that cause its implementation.

Chapter 1 provides the background of this research, by discussing the symptoms and treatment of rheumatoid arthritis, the role of exercise therapy, the necessity of the home-based exercise therapy, and the support for patients with rheumatoid arthritis and other chronic diseases. Based on these findings, the purpose of this study was to clarify the current status of the home-based exercise therapy in patients with rheumatoid arthritis and the factors that implement it, and to examine the ideal way of support.

Chapter 2 describes a research study that clarifies the current status of the home-based exercise therapy for patients with rheumatoid arthritis. A questionnaire survey was conducted for rheumatoid arthritis

patients living in one prefecture and the responses of 226 patients were analyzed. As a result, it was found that 35.4% of the patients knew that the home-based exercise therapy is recommended for patients with rheumatoid arthritis. On the other hand, 93.7% of patients thought that the home-based exercise therapy had a certain effect, and 91.4% of patients thought that the home-based exercise therapy was necessary. Thus, most patients had a high level of knowledge and interest in the home-based exercise therapy.

Chapter 3 describes a research study that clarifies the factors that affect the implementation of the home-based exercise therapy. A questionnaire survey was conducted for rheumatoid arthritis patients living in one prefecture and the answers obtained were divided into two groups, the group that underwent the home-based exercise therapy (n = 94) and the group that did not undergo it (n = 132). As a result of multivariate analysis, it was found that four factors significantly influenced the implementation of the home-based exercise therapy: age, occupation with a high degree of discretion, receiving injection treatment, and recommending the home-based exercise therapy by a doctor. It was also suggested that patients who were in pain or were not in remission were doing it according to their physical condition to the extent that it did not hurt.

Chapter 4 discusses the ideal way of support for the home-based exercise therapy by patients with rheumatoid arthritis. Based on the findings obtained in Chapters 2 and 3, the ideal way of support for the implementation of the home-based exercise therapy was discussed, focusing on three important perspectives: support for patient education, support for self-care, and support for multidisciplinary collaboration. Finally, based on the findings of this study, I concluded that it is important to provide support for patients with rheumatoid arthritis so that they can take the initiative in treating the home-based exercise therapy as an important way of self-care.

## 審 査 結 果

本論文は、関節リウマチ患者の在宅運動療法支援の在り方を検討することを目的とした調査研究であった。第1章：在宅運動療法とその支援に関する研究視角、第2章：在宅運動療法実施の現状、第3章：在宅運動療法の実施に関連する要因、第4章：在宅運動療法の支援の在り方に関する考察から構成されていた。以上の成果は、関節リウマチ患者のQOL向上につながる新たな知見と考えられた。

博士論文審査基準に照らし、以下のように、本論文を評価した。

1. 副論文の作成：本論文の副論文として、本人筆頭の査読付論文1編（関節リウマチ患者における在宅運動療法の現状とその実施要因，日本看護科学会誌 43, 899-908, 2023）を確認した。
2. 研究課題の明確化：在宅運動療法の実施要因の解明と支援の在り方の検討という意義ある研究課題が設定され、論文全体を通して概ね一貫していた。
3. 先行研究の適切な検討：先行研究と既存情報等が必要に応じて数多く収集され、適切に検討・引用されていた。
4. 研究方法の適切な選択と実施：目的達成のために妥当な質問紙調査が計画・実施されており、適切な統計学的手法によってデータが分析されていた。
5. 新たな知見の提示と学問の発展への貢献：在宅運動療法の現状と実施要因に関する新知見が明らかにされ、学術領域と社会に一定の貢献しうるものと評価された。
6. 文章作成能力：論文全体の体裁並びに文章・図表の表現は概ね整っており、科学論文としても適切であった。

最終試験では、全体構成、研究背景、調査方法、今後の展開等に関する質問に対して、適切な回答が得られた。

以上の所見を総合して、上記の者は博士論文審査及び最終試験に合格したものと認める。